



揚洲周延画

中嶋新五郎文

中嶋新五郎

延壽堂

延壽堂

中

久保田彦作綴

浪枕新三尾大
江語編

中嶋新五郎

下

中

上



浪嶋新枕
大江物語

久保田彦作綴

上

AKPO
7

浪枕

江延島

新語

三編

上之巻

久保田彦作綴

揚洲周延画

延壽堂梓



源田仙果藏

自叙
 賣物より花と飾まで。此江の島も花貝の紅の隈取色ざりの。
 畫工が艶らる挿画の愛敬。第初編と發兌せし思つてよりい
 捌け能瀆の真砂のうぶくゆる合巻のの賣口よれ二三の
 中へ算べらる。版元大吉利市を占めつと歡びの況ある。諺に
 よりいふ負相の重衣著る編者が友ある當時の落語家柳亭
 燕枝大哥が。此江の島と席上で跡へ明晩くと客と扇で釣狐
 畏よりみたる能辨の。同氏の所謂戲作頓大頗る筆と口豆
 也。拙作を趣向よき一層声價を倍し礼旁々。まが今版は是
 切と結局の第三編さぞ看客のかたむけと閉口頓首と
 と謝せ

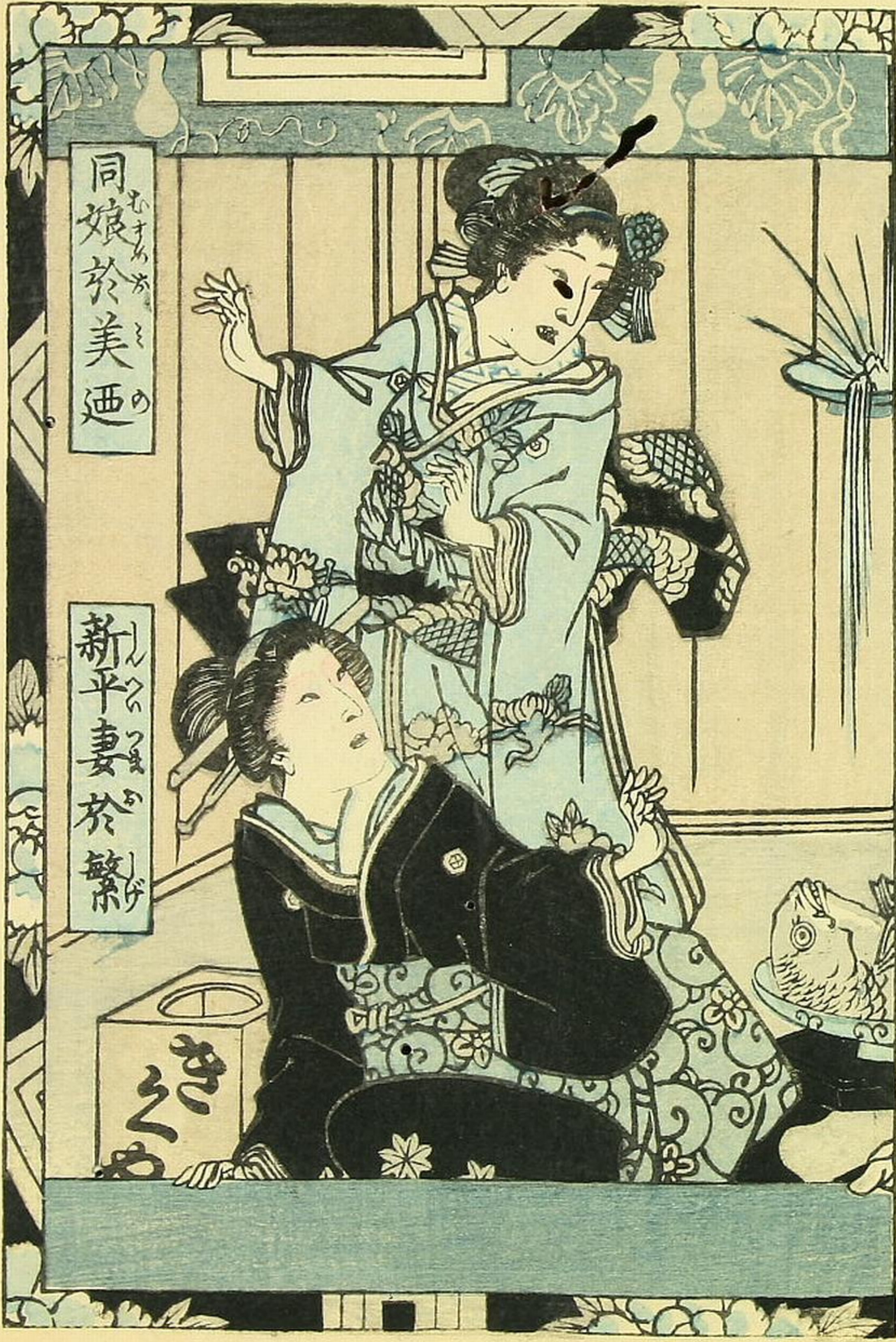
久保田彦作記

良也三

68-8208

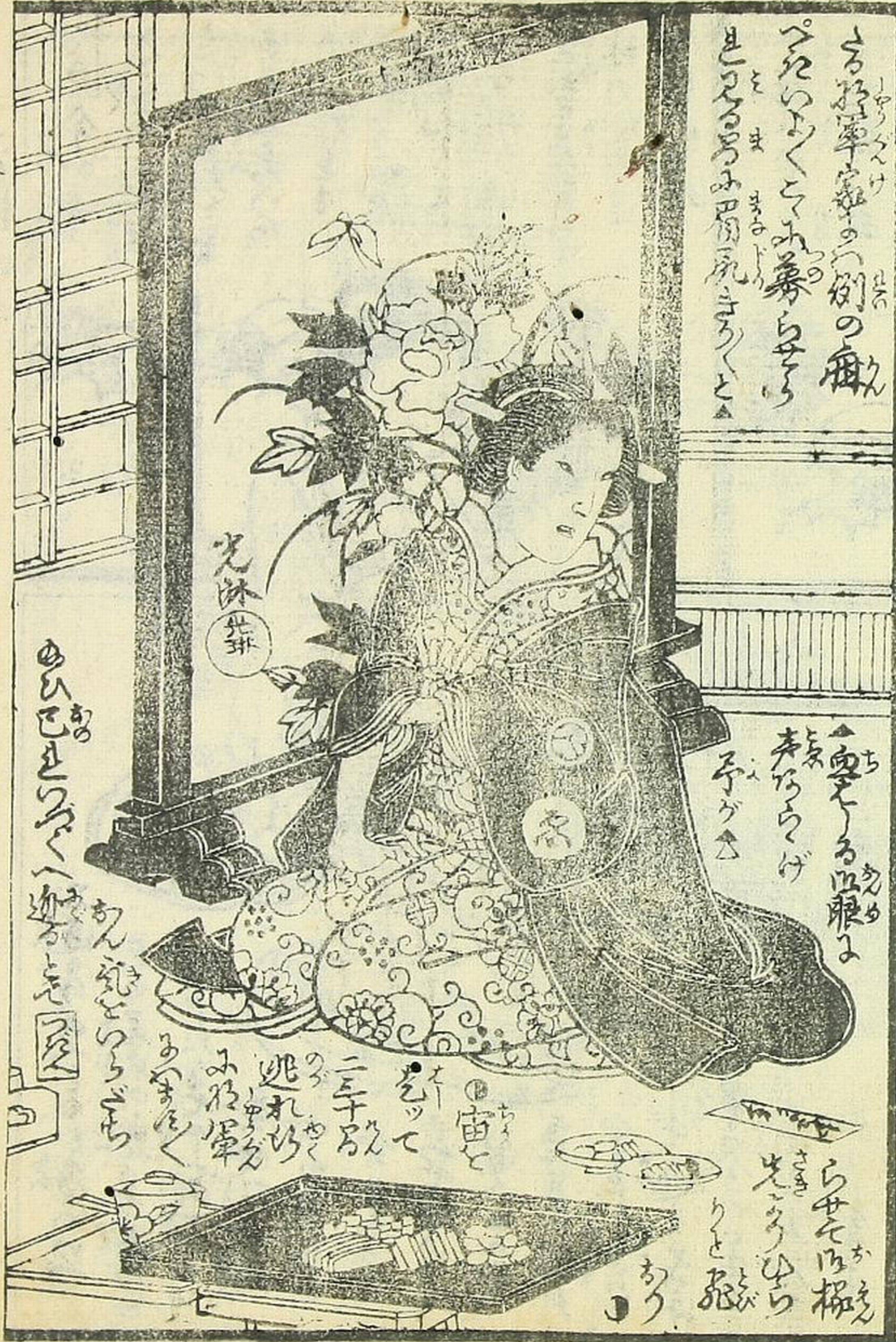
同娘於美迺

新平妻於繁



薩藩谷口新平



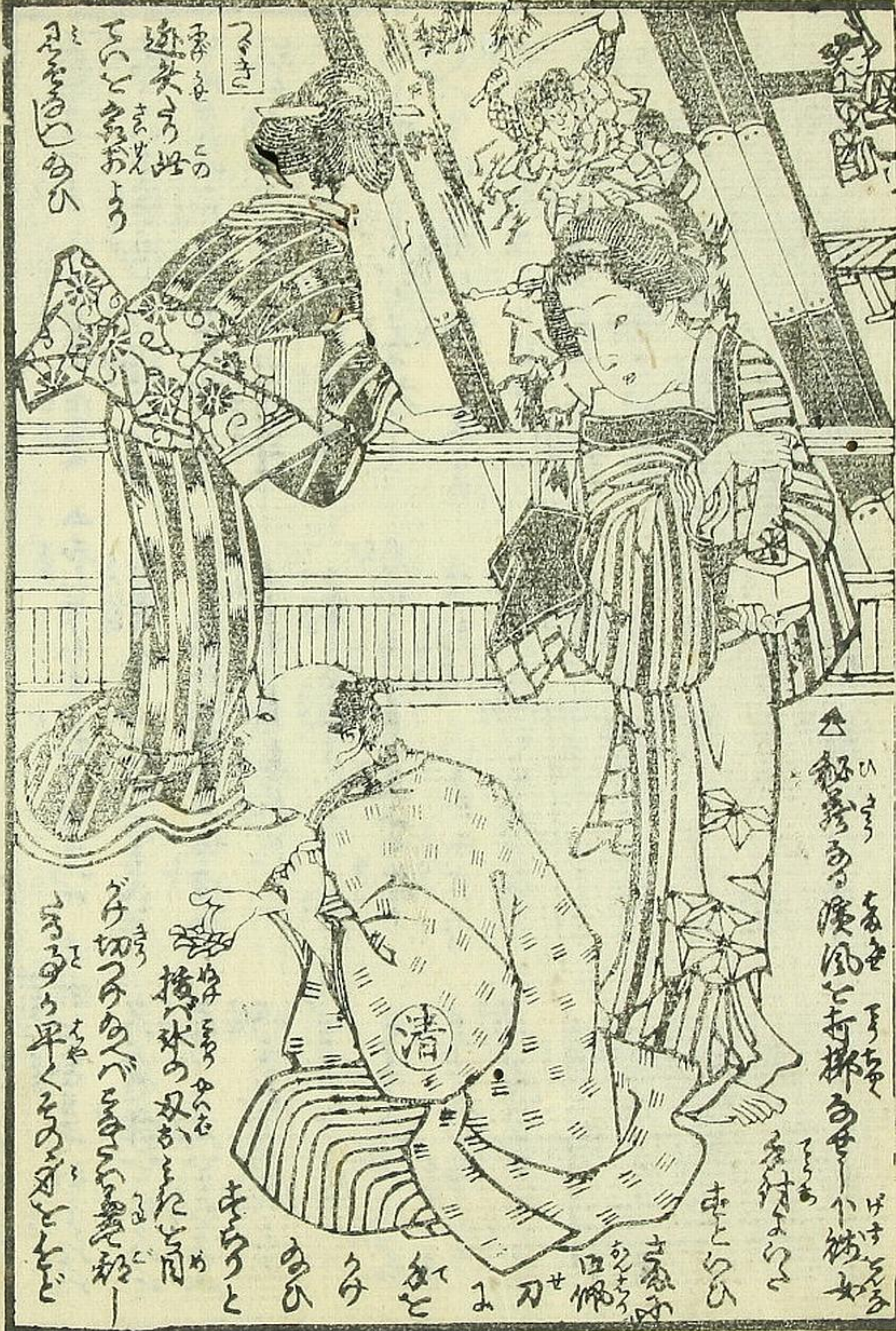


上る御座り候の御座り
 御座り候の御座り
 御座り候の御座り
 御座り候の御座り

御座り候の御座り
 御座り候の御座り

御座り候の御座り
 御座り候の御座り

御座り候の御座り
 御座り候の御座り
 御座り候の御座り
 御座り候の御座り



御座り候の御座り
 御座り候の御座り

御座り候の御座り
 御座り候の御座り

御座り候の御座り
 御座り候の御座り
 御座り候の御座り
 御座り候の御座り



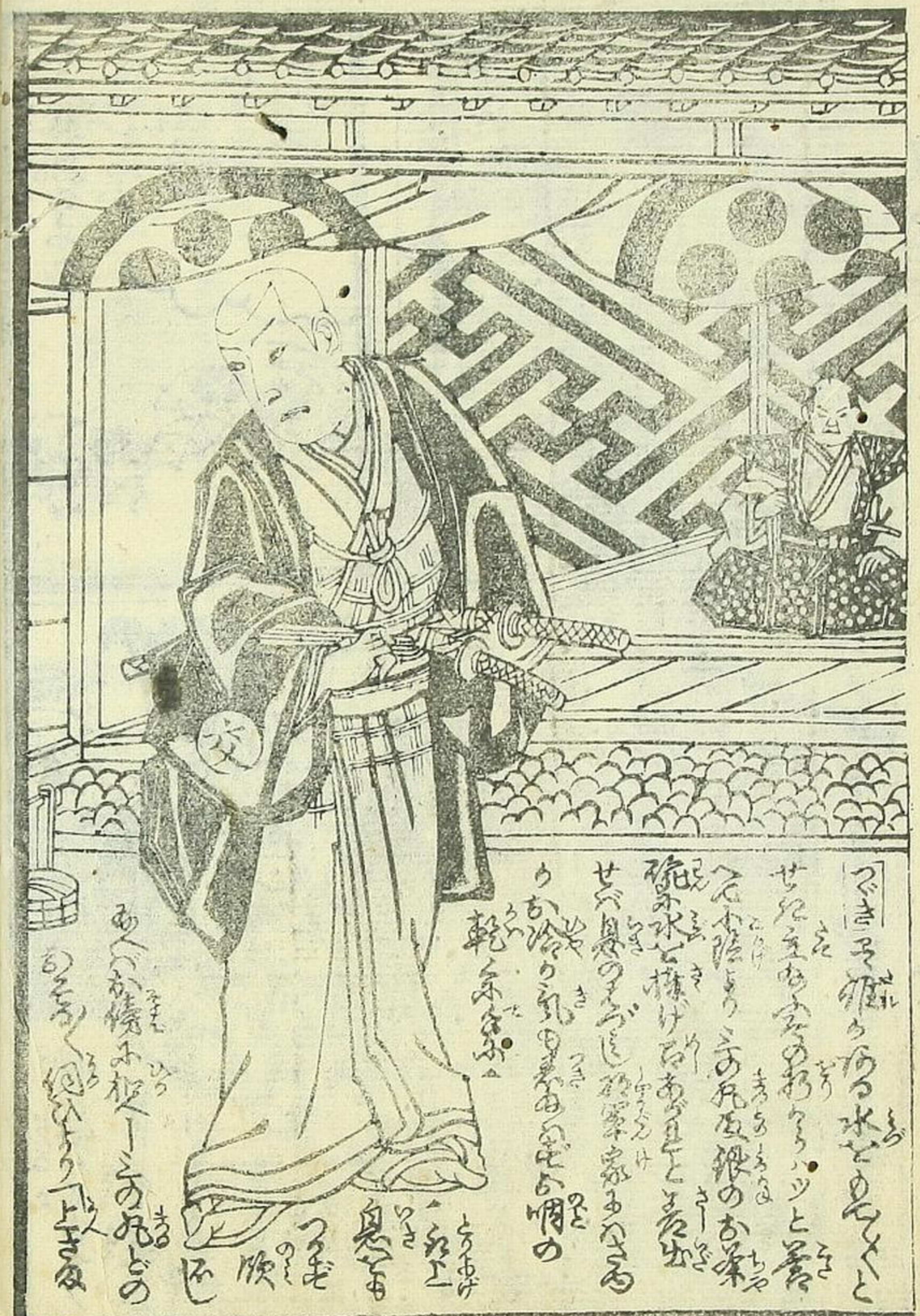
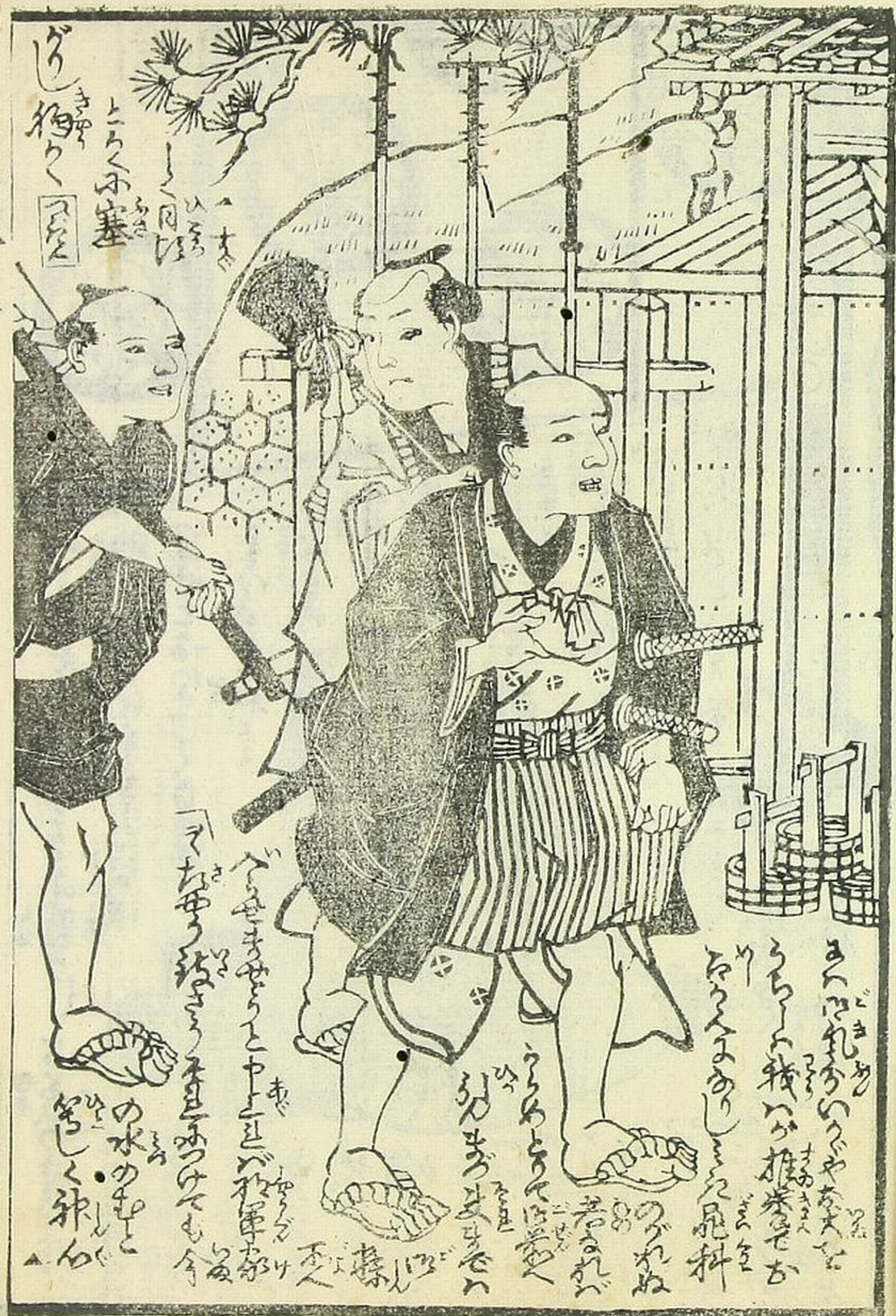
つぎ 命どき
 ぐんまきまな
 うらうらうらと
 よとよきつら
 ほどかねも
 女もうらやな
 まるまると
 まるまると
 まるまると
 水の巡りと
 まるまると
 三つと極込の

又退りぬどもを屋へのり
 是も本木のを遠り
 扱すたふへくよる
 屋曲おは病
 中おま氣も
 寄きあつく
 ゆて退ひく
 びんやま
 まけまはも
 いとをきひ
 とくたねま
 好楽へくへさあり
 うる病もあはて
 一かゆはま



ひの寝所の
 小酒女
 へまの
 女
 軍切

憎た女おま
 けしらの運
 のまも
 不忠の
 子
 とは
 病
 十
 備
 小
 お
 と
 病
 一
 限



海柳屋

五

浪枕江の島新語三編

つぎに諸般人をあつて後習要き

申あゆ彼 柳波の中を舞を舞へり

らまゝにまゝにまゝにまゝに

上もも及ぶべしと安き

ららららららららららら

まゝにまゝにまゝにまゝに

あるこの九とのもとのみ園の

のりりりりりりりりりり



まゝにまゝに

おのらふおのらふ

まゝにまゝに

まゝにまゝに

まゝにまゝに

まゝにまゝに

まゝにまゝに

艶娘毒蛇洲三編

柳水草種清作 楊洲周延画

あまのこ

浪枕江の島新語三編

久保田孝作編輯 楊洲周延画

あまのこ

事情明治太平記

村井静馬著 伏見より能本林に至るまで

初編ハ伏見戦争の始りとして上野東叡山焼討より其外
御一新以来の事情明細に記し居る人情開化一目瞭然
と平ぐ多付繪入りて婦女子も解しやすく綴り書あり

書肆 問屋

東京日本橋通二丁目十三番地
延壽堂 屋 小林鉄次郎版元





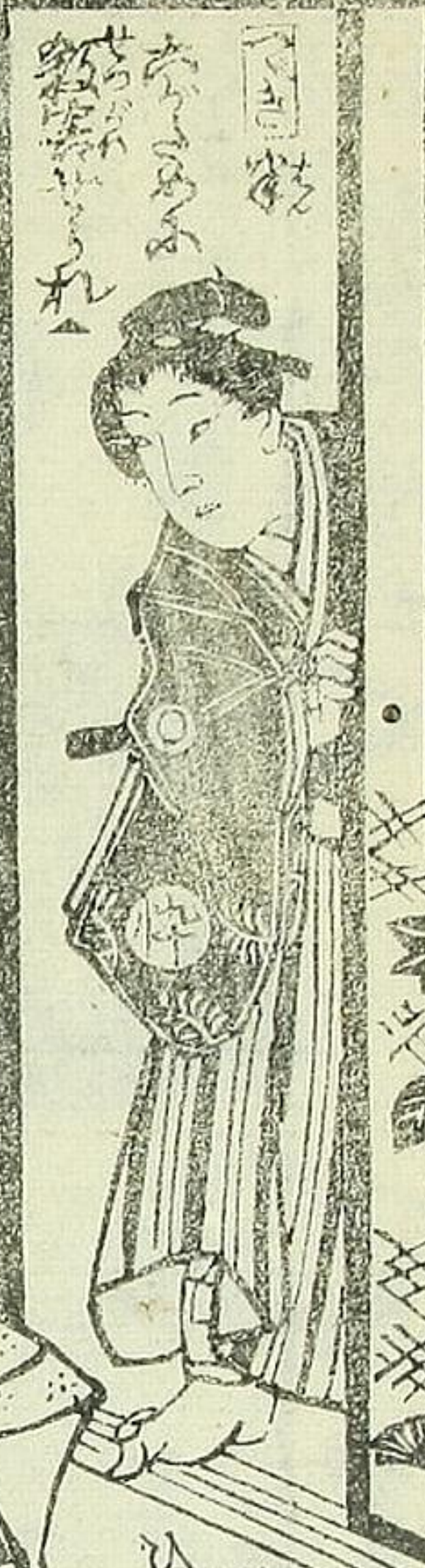
10

15

20

25

30



おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか



おきか
あつちふふ
おきか
おきか



おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか

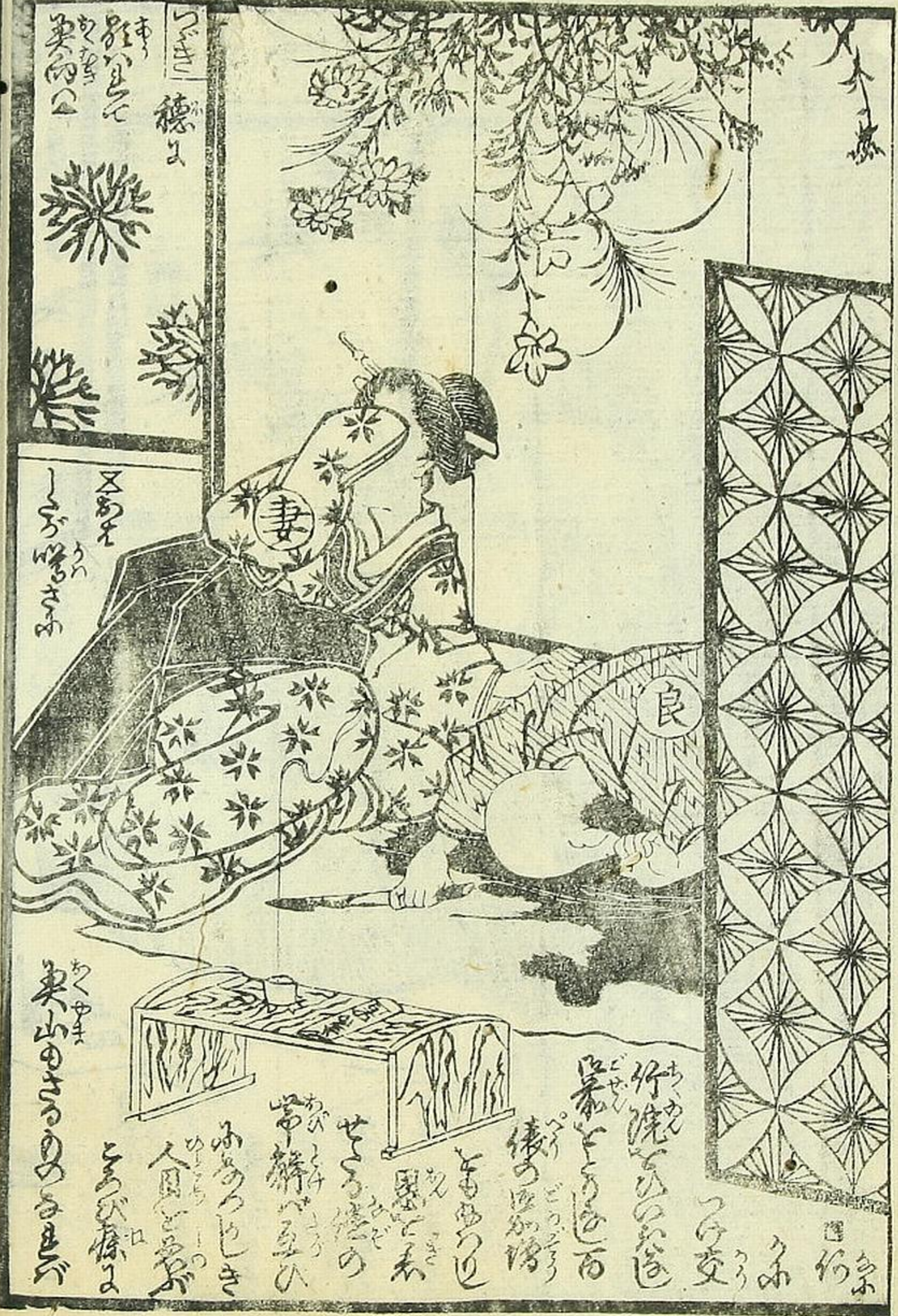


おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか

おきか
あつちふふ
おきか
おきか



徳よ
 徳よ
 徳よ

毒
 毒
 毒

良
 良
 良

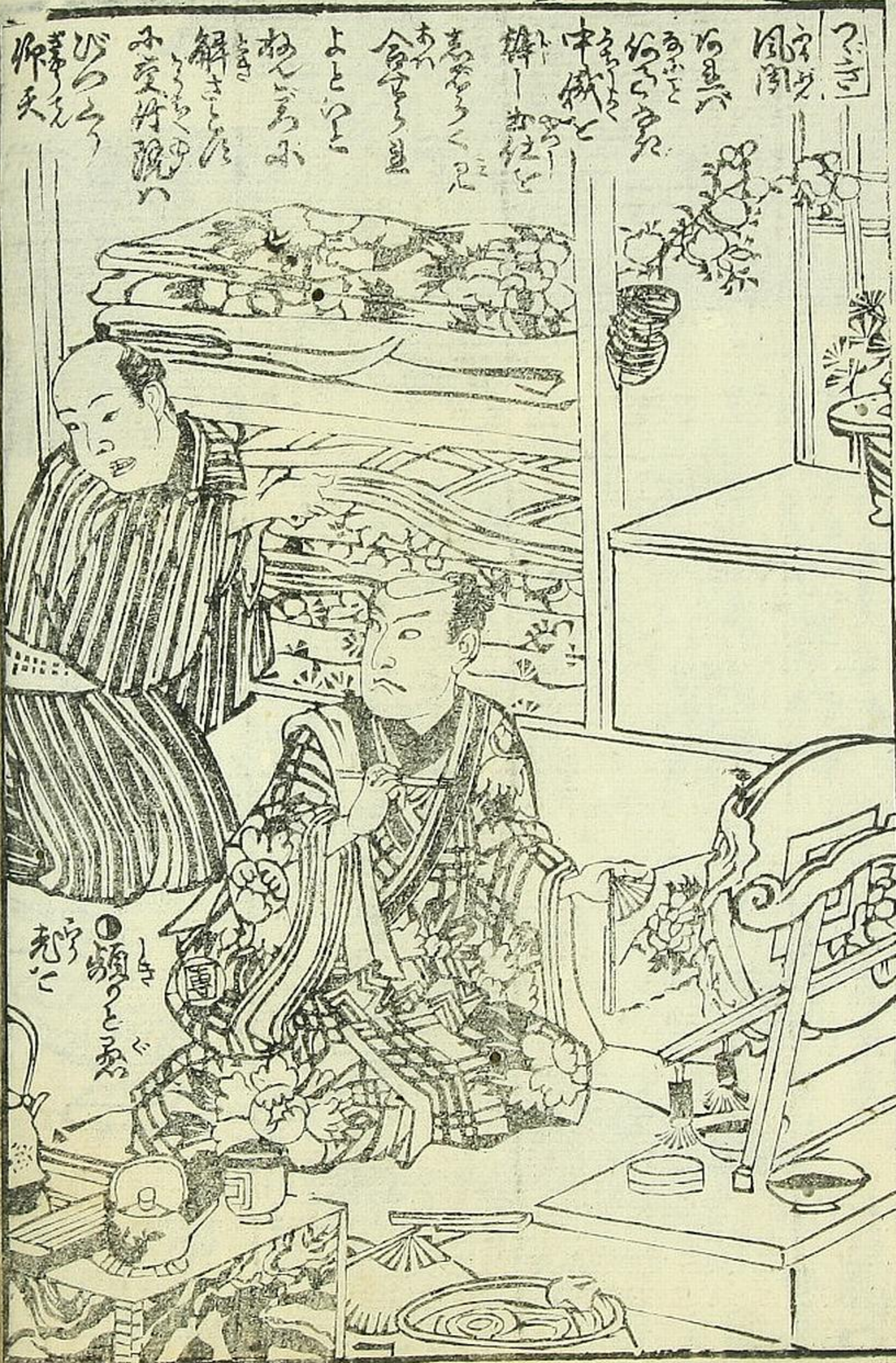
行儀
 行儀
 行儀



丹世
 丹世
 丹世

毒
 毒
 毒

良
 良
 良





つぎ 夏山支那院がひさびさの参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

はるかに夏山支那院の参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ

夏山支那院がひさびさの参りなむひ



△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

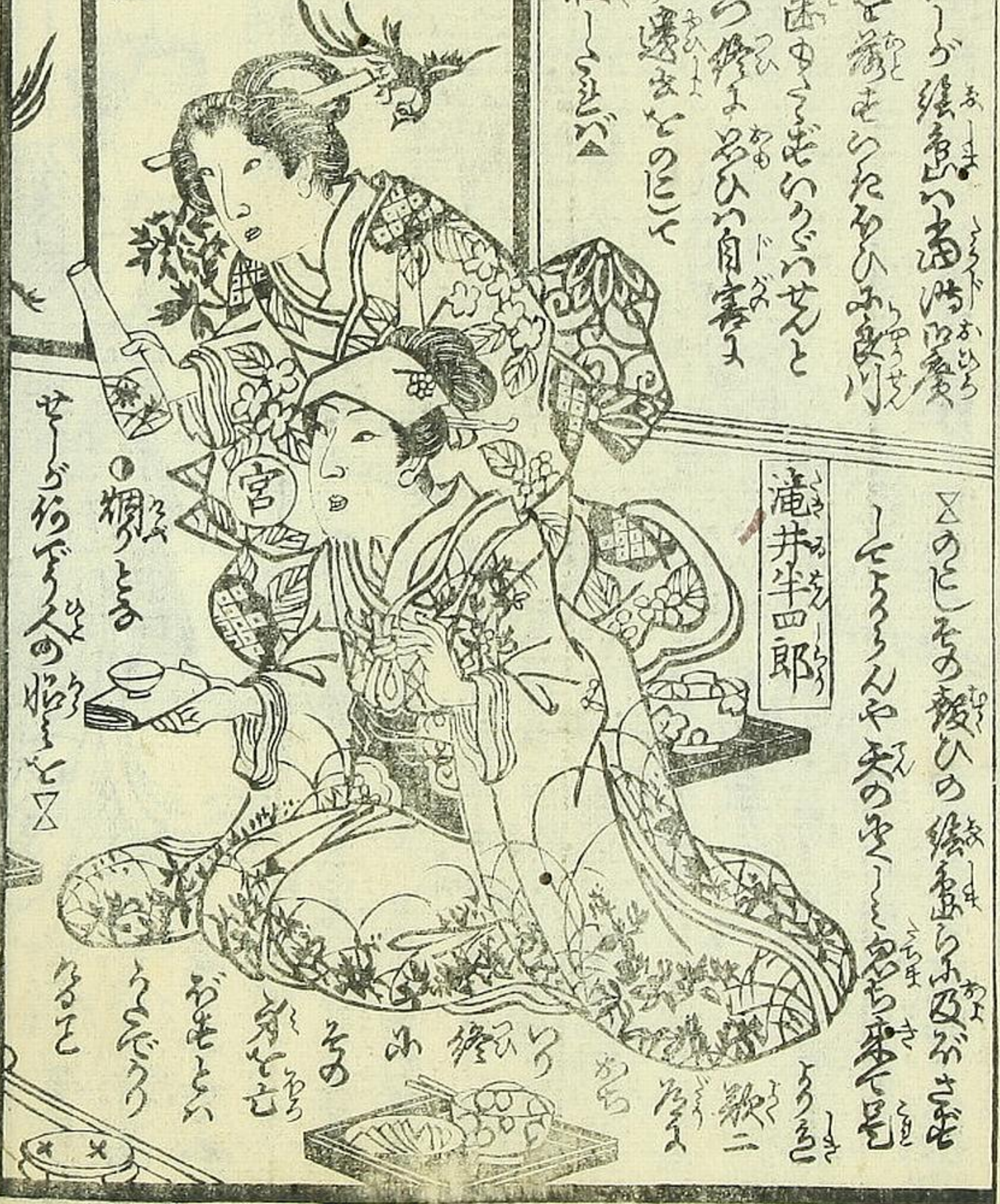
△下まぐの参り

△下まぐの参り

△下まぐの参り

あまのこが縁起の油漬の香
あでなむと花をのたるひの良川
ごたひの園のさかしのうらせと
とら進つ終よあひの自喜よ
さるり遷まとのに
切後一三六

さう
▲妻の
あまのこが
りこを割る
さるりあひ
うら進つとひ
て園のさかしの



△のたその縁ひの縁起の油漬の香
さるり遷まとのに
浦井半四郎

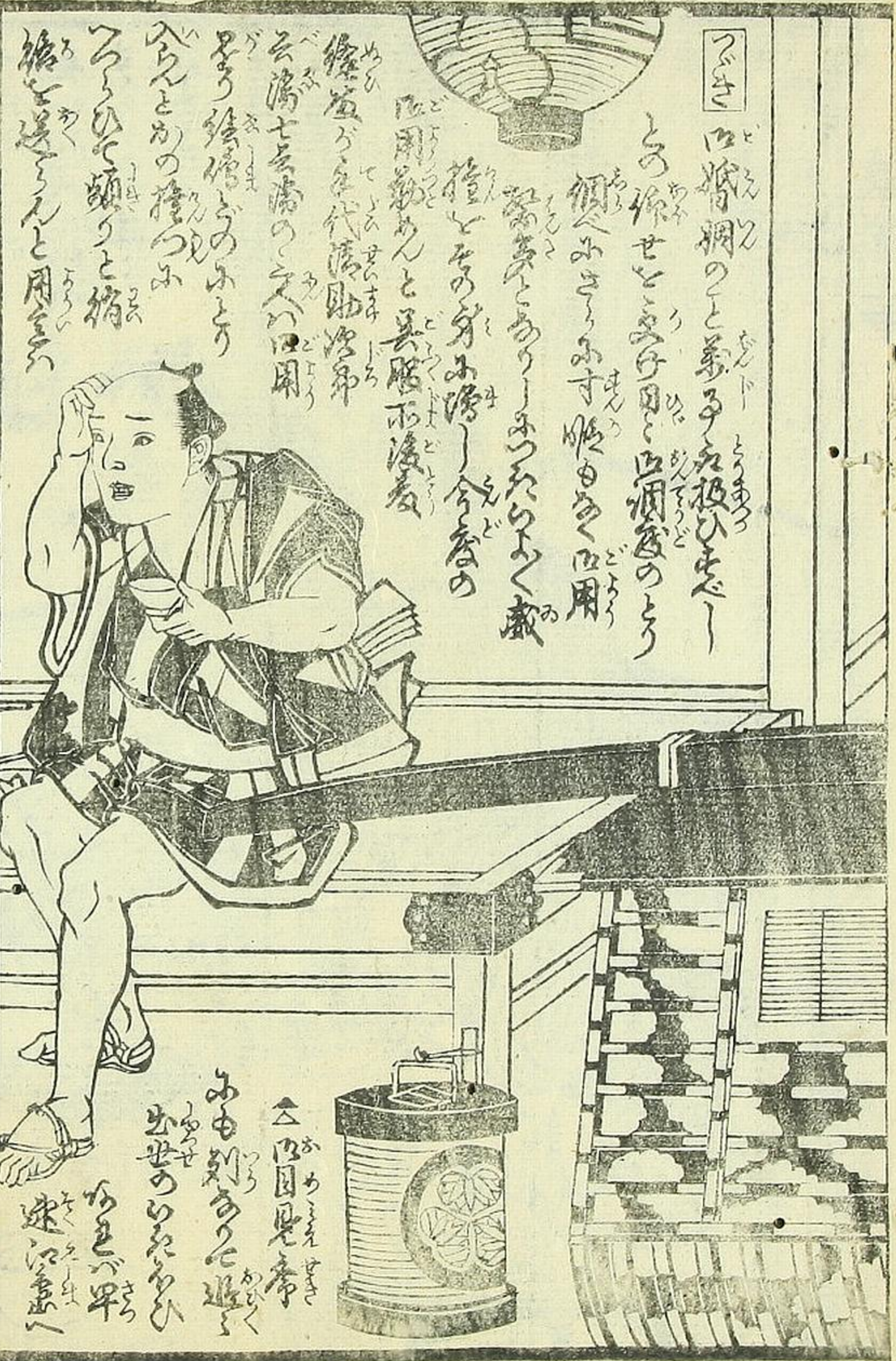
さるり遷まとのに
浦井半四郎
さるり遷まとのに
浦井半四郎

▲妻の
あまのこが
りこを割る
さるりあひ
うら進つとひ
て園のさかしの



さるり遷まとのに
浦井半四郎

さるり遷まとのに
浦井半四郎



つぎ 心持のつとまらぬ極ひまを
 との極せとて行用は心持のつとま
 傾みさうふす極ひまは心持
 極ひまとありしつとまらぬ心持
 極ひまとありしつとまらぬ心持
 極ひまとありしつとまらぬ心持
 極ひまとありしつとまらぬ心持

△心持のつとまらぬ極ひまを
 △心持のつとまらぬ極ひまを
 △心持のつとまらぬ極ひまを
 △心持のつとまらぬ極ひまを



あせどおまらぬ極ひまを
 あせどおまらぬ極ひまを
 あせどおまらぬ極ひまを
 あせどおまらぬ極ひまを
 あせどおまらぬ極ひまを
 あせどおまらぬ極ひまを

△心持のつとまらぬ極ひまを
 △心持のつとまらぬ極ひまを
 △心持のつとまらぬ極ひまを
 △心持のつとまらぬ極ひまを



小倉山 廿日日 泉堂亭是正作
青樹繁 二口編 櫻齋房種焉

算 法 教 授 書 全

鼠 袂 甲 子 真 聞 編 泉堂亭是正作 櫻齋房種焉

人 民 必 携 交 際 義 務 同

延 壽 百 人 一 首 全

大 日 本 海 陸 全 圖 銅 版 全

地 本 錦 繪 問 屋 延 壽 堂 林 九 屋 鉄 次 郎 版 元

東京日本橋通三丁目十一番地

白 鐘 物 評 豊 國

故人種自稿種彦作
永板為壽堂主人高令
日之新聞社少之後編と
出版せられたるもの
同氏之著て其著より一房
を介して其著を看る者
陸境以来之著て其著より
二十四編出版 板元及白

010190516844





A488
9c

浪満る船

江の崎

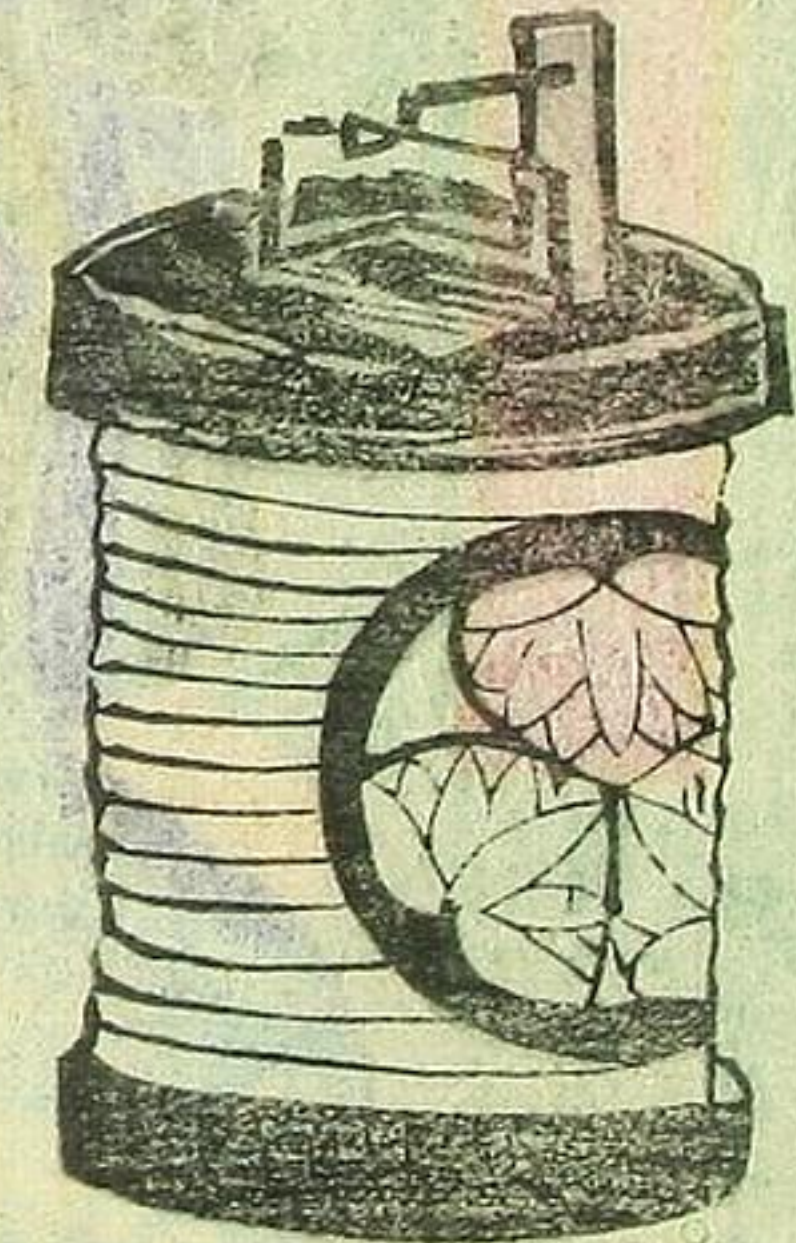
新語

三厘

中筋

久保田彦作綴

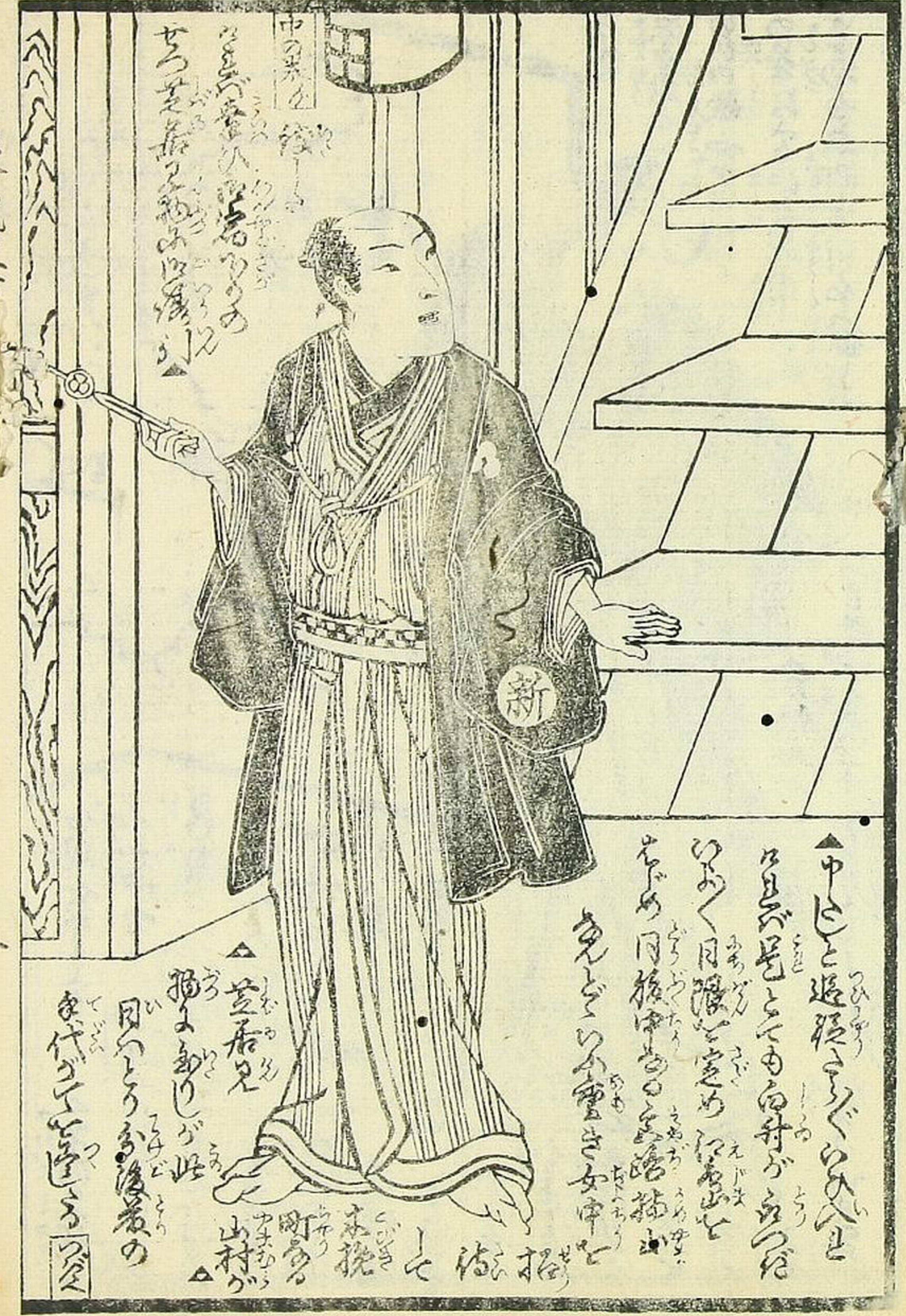
揚洒月延画



延壽堂

新刻

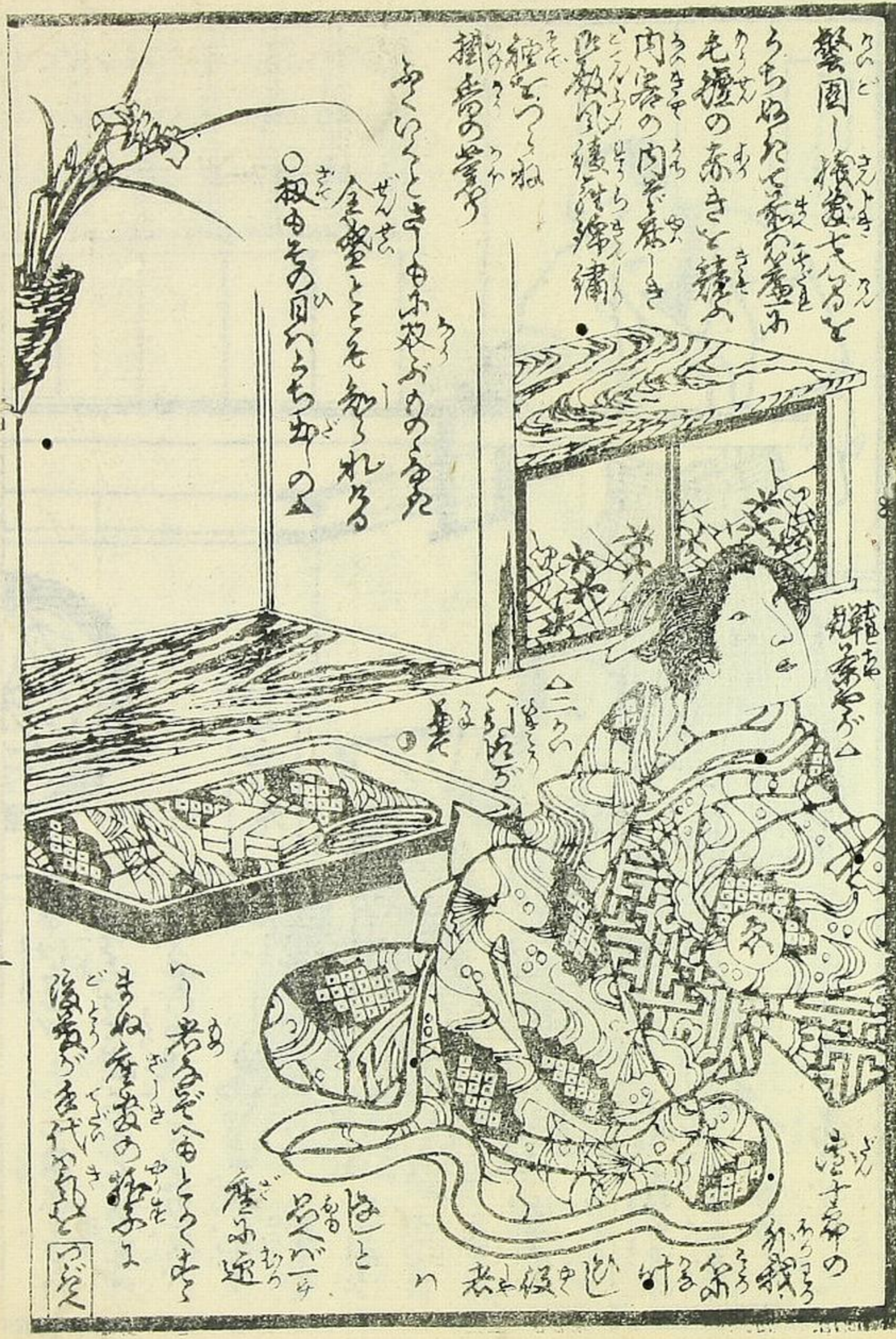
48-8210



中の景
此の景は
久保田彦作の
新語に
あつたもの
なり

中筋と遊覧と云ふは
久保田彦作の
新語に
あつたもの
なり

△ 笠着
△ 揚洒
△ 月延
△ 延壽堂
△ 新刻

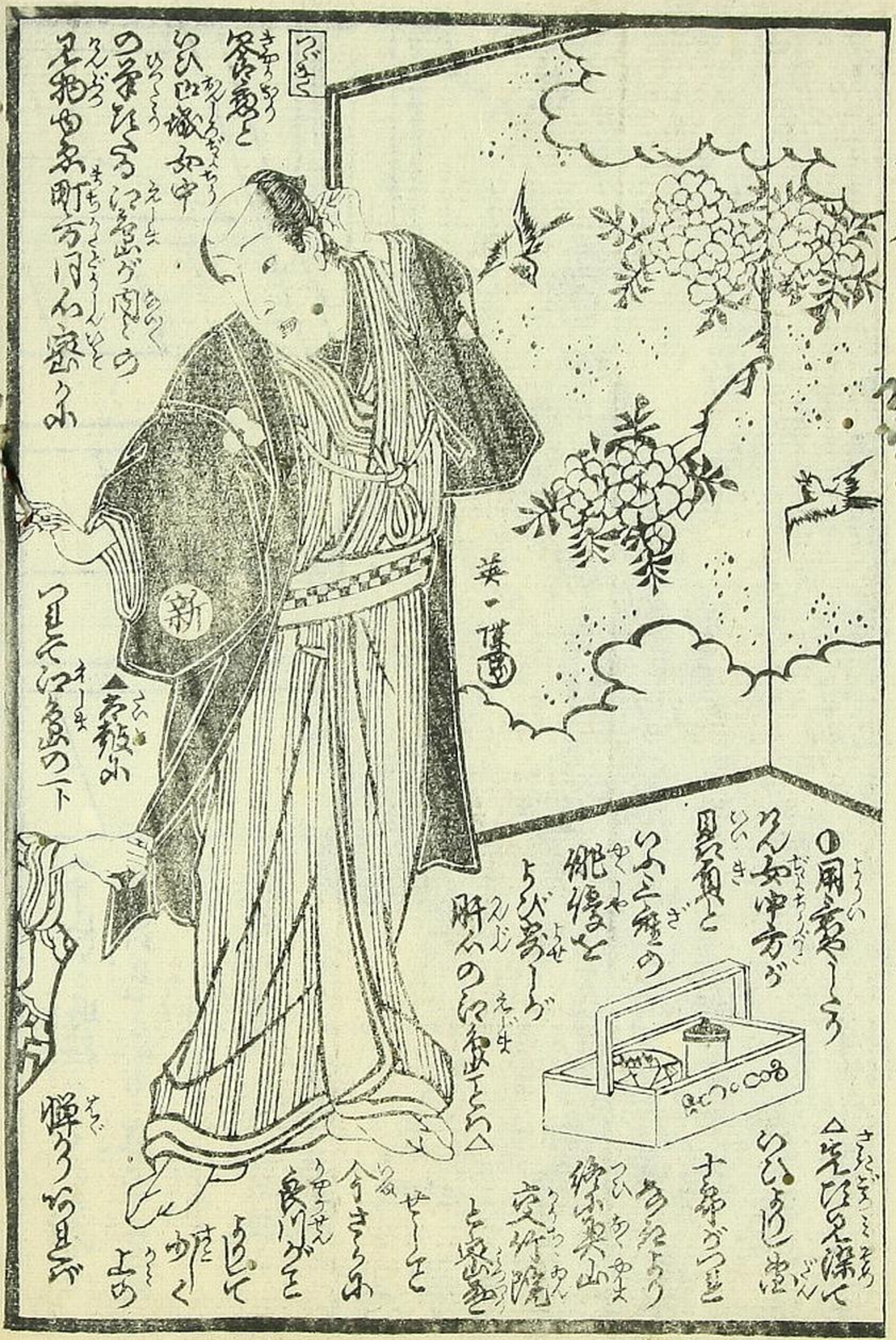


髪圍ハ後髪七八分と
 うちねたて茶の蓋あ
 毛撥の赤きと綾糸
 内巻の内巻糸
 此板の横に綾糸
 綾糸つゝね
 掛高の巻糸

あつとまゆみぬおぬふのゝるた
 全巻とまゆみぬる
 ○板のその目からちぢの

新
 新
 新
 新

〇用書一
 〇用書一
 〇用書一
 〇用書一
 〇用書一



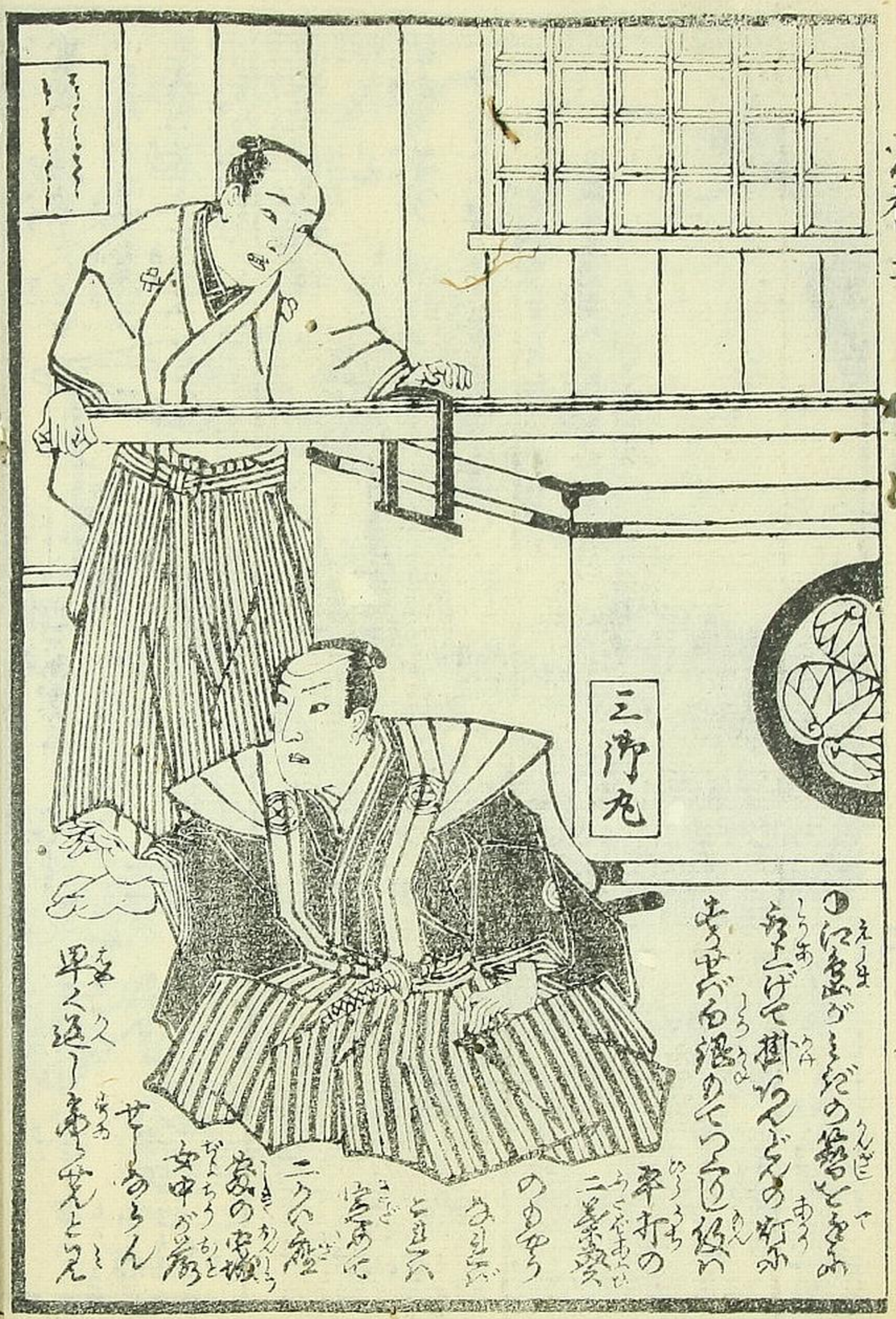
容器と
 のみ山盛の中
 の茶はさるは茶の内
 足物由名町方月ん家ふ

新
 新

目下はまの
 目下はまの
 目下はまの
 目下はまの

〇用書一
 〇用書一
 〇用書一
 〇用書一
 〇用書一

〇用書一
 〇用書一
 〇用書一
 〇用書一
 〇用書一



三津丸

● 江村三津丸の落首
 ちびで掛らざるの釘
 まるむらぬのつりひ

● 早く返す
 せーあん
 二の宿
 女中の宿



● ちびで掛らざるの釘
 まるむらぬのつりひ

● 田舎の落首
 ちびで掛らざるの釘
 まるむらぬのつりひ

正徳五年の

正月十日の

正徳五年の

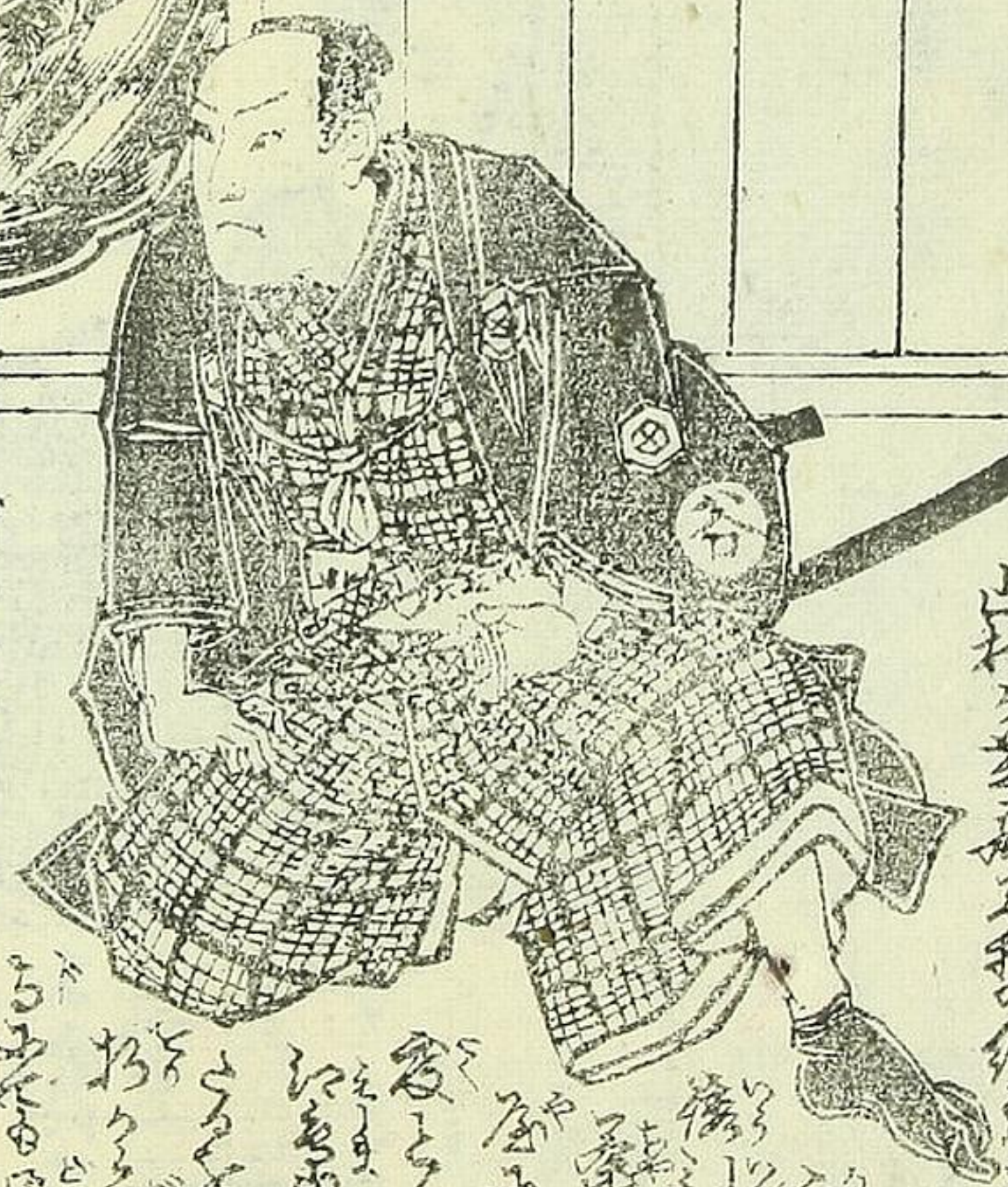
小室の

月老の

月老の



月老の



正徳五年の

正月十日の

正徳五年の

小室の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の

月老の



月老の

月老の

ついでに海防の事
 甘くも思はれぬ
 目下下様は
 ついでに海防の事
 甘くも思はれぬ
 目下下様は
 ついでに海防の事
 甘くも思はれぬ
 目下下様は

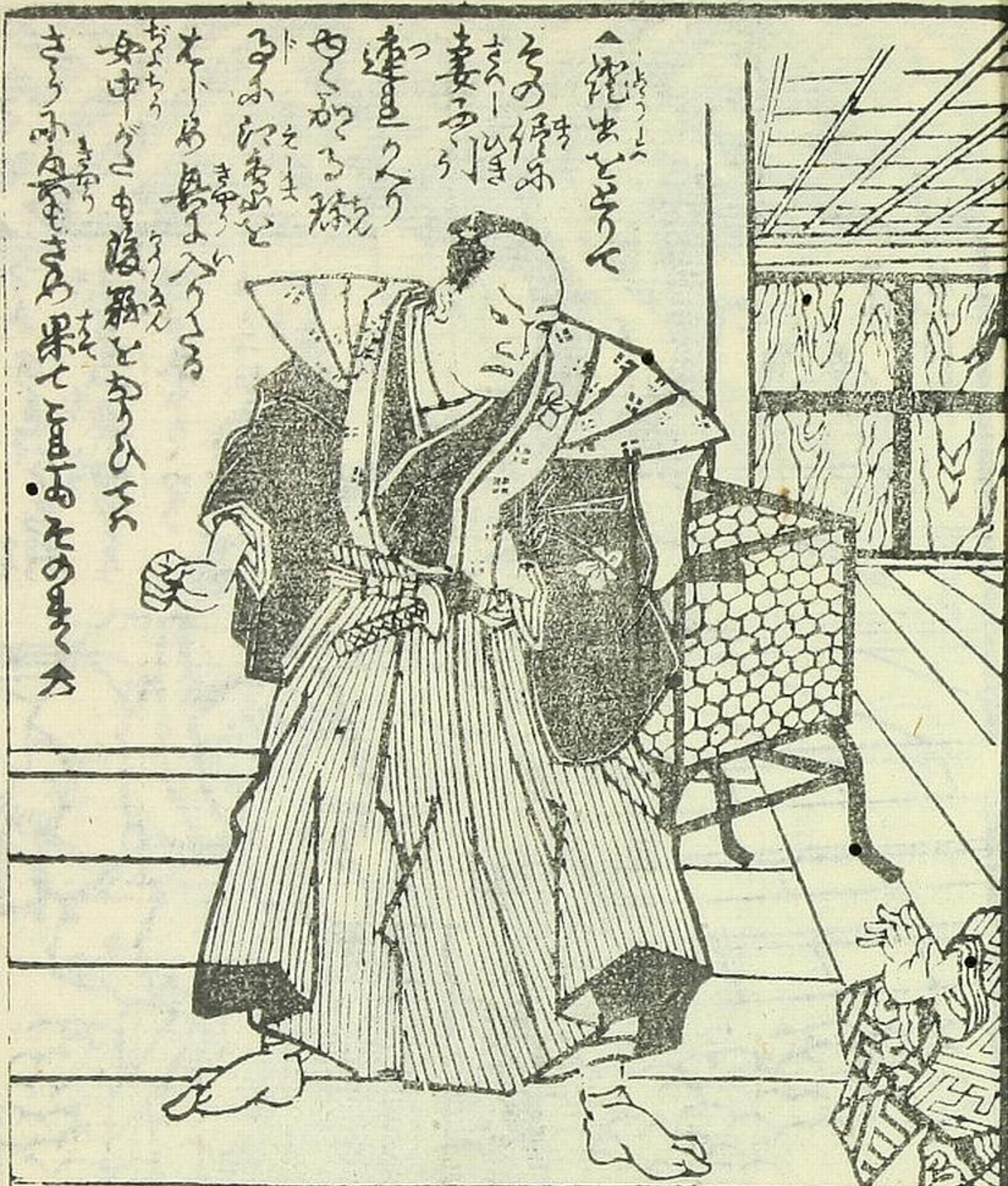


△用付書
 此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書
 此の書は

此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書



此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書
 此の書は
 用付書



徳女とて
 その伊勢
 妻より
 遠くより
 やがて
 多ふに
 女中も
 女中も

良虎三下

好まを
 けか
 この
 女中
 の方
 ひさ
 かう



山
 山
 山

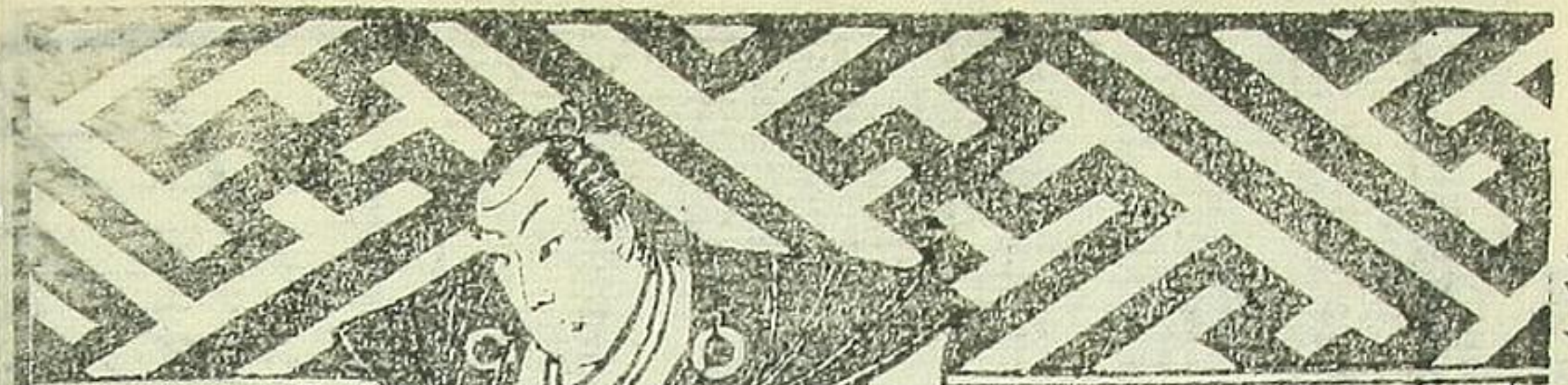
山
 山
 山
 山
 山
 山

かくれ
 たる 奉
 のけり
 ぐん
 せいの
 坊

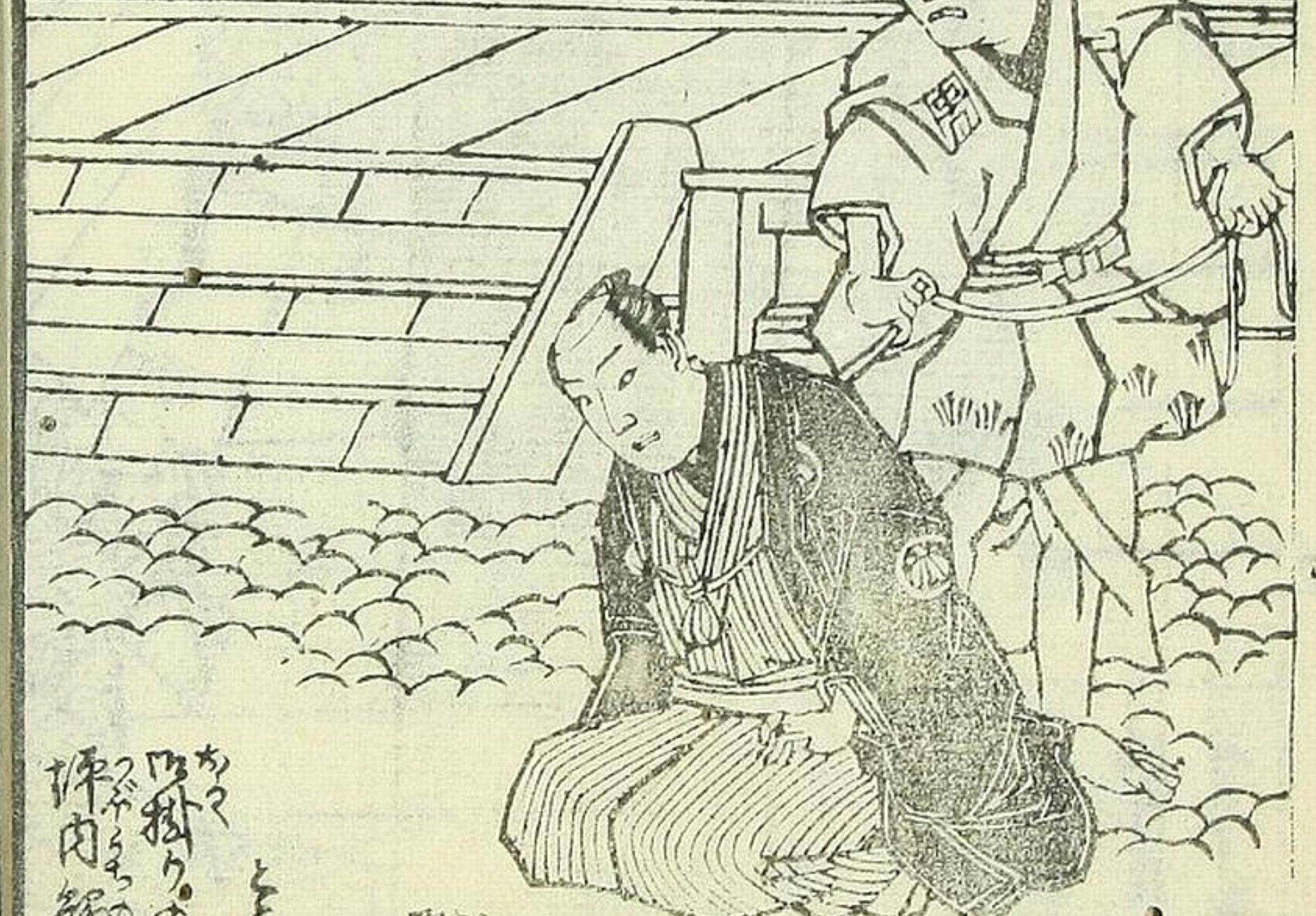
かくれ
 たる 奉
 のけり
 ぐん
 せいの
 坊



かくれ
 たる 奉
 のけり
 ぐん
 せいの
 坊



かくれ
 たる 奉
 のけり
 ぐん
 せいの
 坊



かくれ
 たる 奉
 のけり
 ぐん
 せいの
 坊

久保田彦作綴揚洲周延画



御明治
芝原屋町四丁目
編輯 久保田彦作

小倉山 青樹榮 昔日日新話 編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

算法教授書 全

鼠裱甲子真聞 編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

人民必携交際義務

延壽百人一首 全

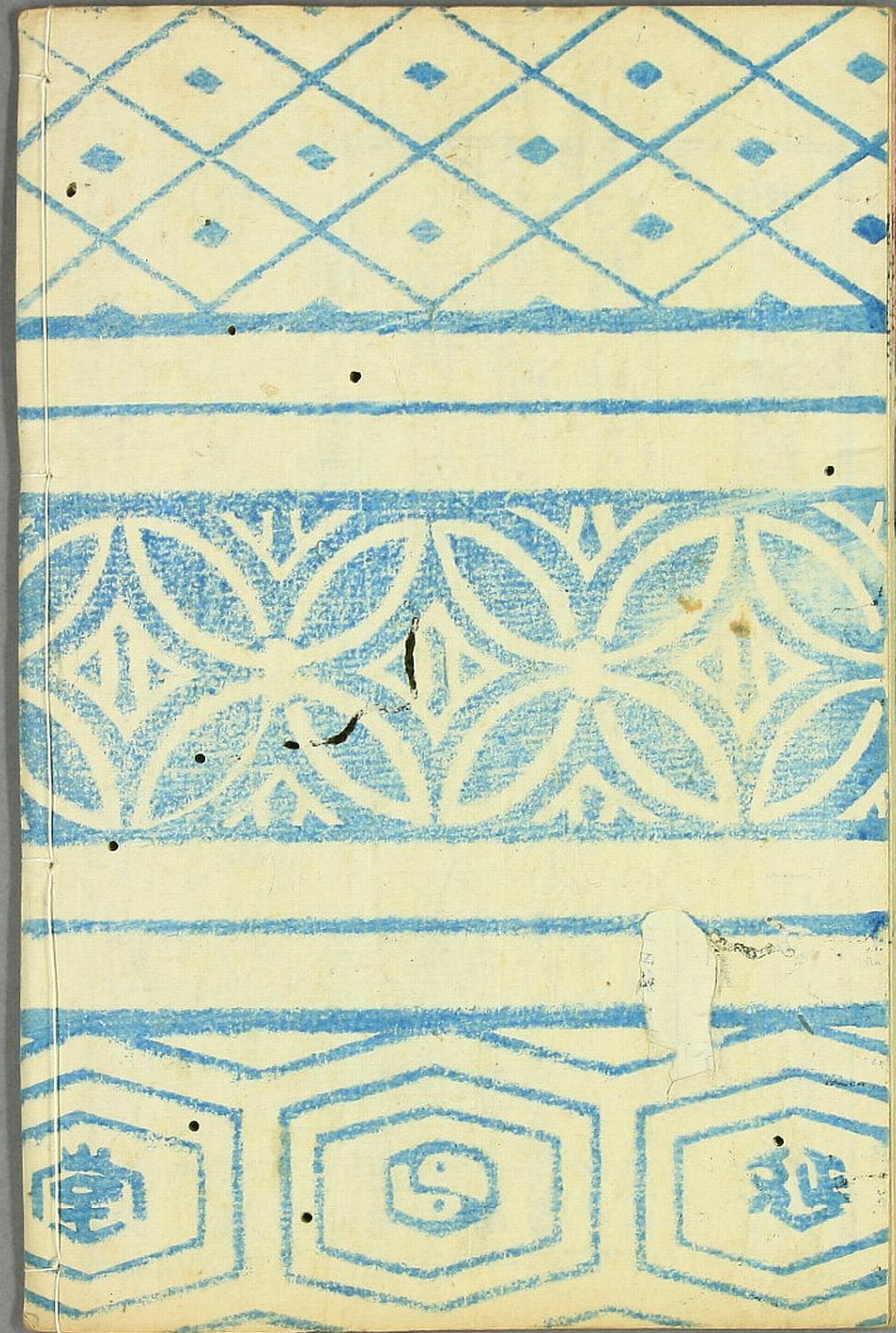
大日本海陸全圖 銅版 全

地本錦繪問屋

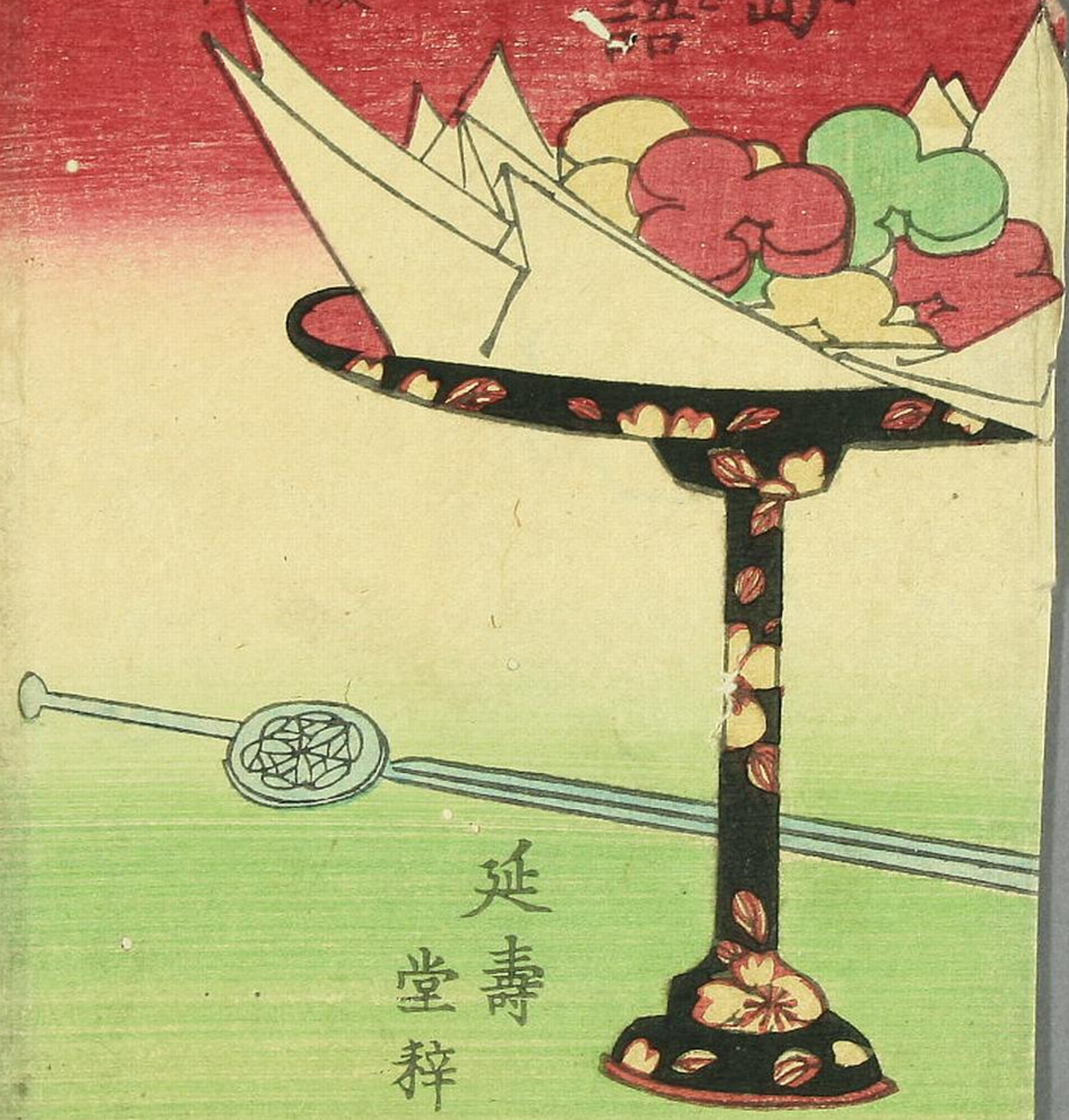
東京日本橋通三丁目十三番地
延壽堂 林小丸屋欽次郎版元

白縫物譚 豊國

故人種自稿種彦作
承板菊壽堂主人為今
日之新聞社少之後編と
由板する不惟何と後悔
月氏又乞て拙者より一房
巻入引つた板は着家方
陸候以来と休て希ふ
六十四編出板 板元致白



浪枕なみまくら
江の島えのしま
新語しんご
三編さんぺん
久保田くぼた
彦作ひこさく綴
楊洲やうしゅう
周延画しゅうえんが



延壽堂えんじゆうどう
粹すい